

〔嬉遊笑覽思八〕寶船の繪は、略○中むかしは何やうにかきたるか、彼相阿彌がかきたるよしの摸本あれども、實否はえらす、それは唯米俵を積たる船なり、其心をおもふに、いねつむといふことにや、年の初め寐る事をさ云ふなり、滑稽雜談に寢臥と尋常の如く唱ふるは、病床などに紛らはしければかくいふなり、涙を流すを米こぼすといふに同じ、是またいつの頃よりいひそめたるか、齋宮の諱言の遺風と覺ゆ、さりながら件の巽阿彌が覺書にも、舟とのみいひしをみれば、物を載たるにはおらぬなるべし、そはあしき夢を流さむとてするわざなればなり、さるを後には何くれと書をへて、今のごとなれりとみゆ、略○中道祐が紀事に、近世梓に鐫てうるといへれば、其前は書たるを用ひしこと、えらる、そは賣ものにありやなしや、よき人のみにて、下ざまはせざりしならん、下にも學ぶに及んで板行出さしかば、末々の者ども、する事となれるは、又その後とぞ思はる、

〔古事談臣二〕業房龜王兵衛之時、夢ニ御前ヲ奉被追却、門外へ被追出ト見テ、後朝康頼ニカ、ル夢ヲ見ツル、年始ニフクタノシキ事也ト云ケレバ、康頼云、極吉之夢也、可任、軛負之尉之夢也、軛負陣門外之故云々、果シテ十ヶ日中拜左衛門尉云々、

〔嬉遊笑覽思八〕初夢、古事談、略○中初夢とはなけれど、初春の夢を祝ふなり、

〔橘窓自語下〕五條天神今松原通西の神寶は、金のたから船なるよし、天明の大火災の時、動座させ奉りしこと、町家菊屋權兵衛語られしと、中野能充物語せり、この天神は少名彦の神なり、例年大晦日節分等に、たから船の畫を出せるを、人々請受けて守とするをおもへば、御神の御影の心にやあらん、

〔安齋隨筆前編十四〕一寶舟繪 壬寅正月、予が家に賀客來る、床に禁裏にて用ひ給ふ寶舟の繪を懸置たるを、客見て、寶舟繪予は不用也、此繪を用ひたればとて、福の來るべき理なし、無益の物也